

2020年7月12日

種を蒔く人のたとえ

今日のマタイ福音書では、有名な「種を蒔く人のたとえ話」（マタ13・1－23）が選ばれています。4つの異なる土地：道端、石地、茨<いばら>の間の地、良い土地、に蒔かれた「種」の物語は、わたしたちにどのようなメッセージを告げようとしているのでしょうか。「種を蒔く人」はキリストご自身であり、「種」はキリストの言葉（みことば）であることはすぐに想像できるでしょう。しかしこのたとえ話のねらいがどこにあるのか見いだすことは容易なことではありません。

人によって見方は異なるかもしれませんが、恐らく、多くの人々が種を蒔く際には、効率や能率を考え、より少ない労力で多くの実りがもたらされるような方法をじっくり検討した上で、種蒔きに入るのではないのでしょうか。入念に準備したとしても、その年の天候や、さまざまな条件に影響を受け「今年の収穫は少なかった」「今年のは昨年よりも甘く美味しいものができた」という風に異なる結果を見いだすように見えます。

ところで、マタイ福音書の種蒔く人は、多くの人が予想する収穫の増減や良い土地を入念に選ぶことには一切関心がありません。これは驚くべきことのように思われます。そもそも畑ではない土地にも勢いよく種を蒔いています。明らかに芽を出しても、伸び悩むに違いない土地にも気前よく種を蒔いています。もし、良い土地に蒔けば「あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍」（マタ13・8）にもなる本物の価値ある種です。この種蒔く人は、すこぶる気前が良いのです。今日の答唱詩編には、神さまの隠された計画を知る手がかりが示されています。

「あなたの恵みは豊作をもたらし、
あなたの訪れるところに豊かさがあふれる。
荒れ野のまきばも若草にもえ、
丘一面に喜びがこだまする。」（詩編65）

詩編には「荒れ野」が丘一面の「若草に」変えられていく姿が描かれています。この変化を、わたしたちの心の風景に重ね合わせて考えることもできるでしょう。もし、わたしたちの心が一時的に「荒れ野」（道端、石地、茨の間の地）の

ようになってしまったとしても、みことばが訪れるところ、神さまはその心を「良い土地」に変えてくださることでしょう。第一朗読のイザヤの預言でも「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのものに戻らない」（イザ55・10-11）とみことばが果たす使命が告げられています。

コロナ禍の対応がわたしたちの日常となっていますが、九州地方における豪雨災害も重なり、心の荒れ野が広がっているかもしれません。しかしどのような荒れ果てた土地にも、みことばを蒔いてくださった主・キリストに信頼し、ともに心の畑を耕すことができますように。

「被造物も、
いつか滅びへの隷属から解放されて、
神の子供たちの栄光に輝く自由に
あずかれるからです。」
(ロマ8・21)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝